

2007年10月25日

発表者：新日鉄ソリューションズ(株)

代表取締役社長 北川 三雄

2007年9月中間期 決算説明会 Q&A (要旨)

1.全体業績

Q:昨年度から売上・利益が目に見えて成長し始めたが、どのような背景があるのか。また、中期的な成長見通しを教えて欲しい。

A:ここ数年、システム開発・営業といった業務プロセスの標準化など事業基盤を強化してきた。景気の変動に左右されない強い事業基盤が育っており、これに足元のIT需要拡大も加わり、増収・増益を実現している。中期的な視点で見ると、足元2,200人程度のNS Solutions 本体社員について、今年度130人強の新卒採用を行うなど、毎年6-7%のペースで増強している。また、生産性向上に向けた活動、選択と集中、高付加価値ビジネスへのシフトなども進めるし、データセンタービジネスなど人的リソースがネックにならない領域も拡大させる。今年度は前年度に比べ100億円強の増収見込みだが、このペースで売上成長出来れば、中期的に売上2,000億円が射程圏内に入る。

Q:今年度下期の業績予想値には上振れ余地があるのではないか。

A:プロジェクト単位に積み上げ計算を行うことで予想値を設定している。予想である以上、リスクや収益性には一定の振れ幅がある。最も可能性の高いと思われる (most likely な) 振れ幅の中心付近で予想値を開示している。

2.個別事業分野

Q:親会社である新日鉄向けの売上が前年同期比で増加に転じている。この傾向は今後も続くのか。

A:同社向けの売上はこれまで保守・運用領域を中心に減少基調にあった。具体的

な I T 投資規模は同社が意思決定することなので分からないけれど、世界的な鉄鋼業界の情勢や能力増強・高級鋼化などの動きを背景に I T 投資が継続的に行われることを期待している。

3.その他

Q:ソフトウェア開発センターの位置付けを教えてください。横浜にあるシステム研究開発センターとの違いは何か。

A:従来からある横浜のシステム研究開発センターは、アプリケーションや I T 基盤などの先端技術の研究開発部門。一方、今回設置するソフトウェア開発センターは、具体的な実装まで行うところで、実際に事業部・プロジェクトで行っている開発を標準化して、取り出して、あたかも工場であるかのごとくセンターを作ってサービスを提供していくもの。ソフトウェア開発センターはまだ準備段階であり今のところ大きな投資を予定していない。

Q:中国でのオフショア開発の現状と今後の見通しを教えてください。

A:大連華信計算機技術有限公司と契約を結んでおり、同社内に当社向けの開発センターを設立している。開発センターの人員規模はまだ小さいが、長期的には拡大したい。

以上